

特集・成熟社会における都市づくり⑥

四則演算の都市計画

成熟都市の都市計画を考える

西村 幸夫

- 一——△割り算▽としての都市計画
- 二——△足し算▽としての都市計画
- 三——△引き算▽としての都市計画の勃興
- 四——新たな都市計画の方向は
- 五——これからの都市計画へ向けて

随分荒っぽい言い方ではあるが、都市計画のあり方、特に我が国の都市計画のあり方について考えるとき、そこにはいくつかのレベルがあるように思える。そしてそれは四則演算にたとえることができるように思えるのだ。

一——△割り算▽としての都市計画

初期の都市計画は空間を分割することから始まったといえることができる。

中世の都市の多くは外界に対して閉じた空間として成立してきた。また歴史的な都市の成立過程を云々する以前に、現実の問題として城壁で囲われた閉じられた空間として王宮や都市が

成立するという都市認識の構造はあるいは当然のことだったともいえるだろう。

もちろん都市自体は自然発生的に生成してゆく側面も強いが、イメージ総体としての都市空間を考えるとまず都市像が存在し、この都市像に形を与えるべく都市空間内に様々な施設が都市装置として配置されていると考えることができる。都市全体から出発してそれぞれの部分へ機能を割り振ってゆくというこの時代の都市計画のあり方を、四則演算で表現すると△割り算▽的な都市計画であるとも言える。

ヨーロッパ旧世界の都市計画は、近代以降もこうした都市総体あるいは地域総体から出発して単体へ至る△割り算▽的な発想がその根底に

あったともいえる。ヨーロッパの町並みが美しいのも個々の建物の寄せ集めとして地区が形成されているのではなく、ある一定の様相に規定された地区空間が歴史の中で形成されており、そのなかに個々の建物が位置付けられているからだ。都市全体は時代とともに成長していったが、それとて個々の建物の増殖としてではなく、地区空間を付け加えることによって拡大したといえるのだ。

二——△足し算▽としての都市計画

これに対してわが国ではどうか。わが国をはじめとする新世界・第三世界の都

市における第一の計画課題は不足している都市施設を次々と造ってゆくことであつたといえる。現に今でもほとんど都市において都市基盤の整備を行うことがそのまま都市の近代化とみなされているのである。交通通信網の整備や各種公共公益施設の建設、公園の確保などのほか、都市計画を推進するための行政機構を整えることや法制度の整備ももちろんこのなかに含まれる。

こうした状況は、都市開発の方針に疑問を差しはさむ必要のない、ある意味では幸せな段階であるといえる。近代的な都市にふさわしい都市機能として不足しているものを次々とつけ足していくことがこの段階の都市計画の課題である。その意味でこの段階の都市計画を△足し算▽としての都市計画と呼ぶことができる。

△足し算▽としての都市計画の結果、前近代のそれなりに調和のとれた都市景観が大きく変容してゆくことになる。もっとも効率的にもっとも経済的に都市を機能させるための様々な装置が景観のなかに付加され、累積されていったのだ。付加すべきものの相互の脈絡など気にしている余裕はないだろう。都市の内包だけでなく外延も変容していった。郊外への無秩序なスプロールも△足し算▽の都市化の結果と見ることが出来る。

こうした現象は個々人の都市生活においても同様である。私有の土地や建物はそのまま自己表現の場となり、無限の情報が乱雑な景色となって街路を埋めつくした。これが△足し算▽の都市計画以外の何であらうか。

アジアの大都市がいずれも例外なく猥雑な雰囲気を出しているのはうたがいがなくこうした△足し算▽の都市生活行為の結果に他ならない。

三——△引き算▽としての都市計画の勃興

△足し算▽としての都市計画には、しかしながら、いくつかの決定的な限界がある。

その第一は△足し算▽のもとでは総和としての全体を構想することができないということである。いわゆる旧世界の都市が城壁に囲われた閉じられた空間として全体像を構成し、その分割・区分によって地区の機能を割り付けてゆくという△割り算▽の都市計画から出発したのに対して、近代化の過程で△足し算▽の都市化をすすめてきた新世界の都市にとっては、総和が一定の都市計画といったあたかも予定調和的な計画はそもそも期待できないのだ。

たとえば均質に分離されたアメリカのグリッドパターンは土地取り引きを容易にするためだっ

たといわれているが、文字どおり平等に民主主義的に分割されていった土地はシステム上、総和としての都市をあらかじめ限ることは正反対の性格をもっていた。グリッドは都市空間を区切るために設定されたというよりは、都市空間を均質に外延へと拡散させてゆくために引かれたといえよう。

ここで支配的だったのは明らかに△割り算▽としての都市計画ではなく、個々のロットの△足し算▽のうえに成り立つ都市計画だったのである。

それでは、新世界・第三世界の都市は△足し算▽で無限に膨張し、あるいはあたかもエントロピーを増大させていくかのように乱雑な景観を生み続けることを宿命づけられているのか。必ずしもそうとは限らないだろう。

都市基盤がある程度充足してきた大都市の都心部では、都市景観の設備や都市アメニティの向上など△足し算▽的というよりはむしろ△引き算▽的な都市計画が始まりつつある。

景観整備のために電柱を撤去し、建物の色彩や形態、材質、位置、看板の規模などをコントロールしようとするのは、多すぎる景観のボキャブラリーをなんとか減らして統一感のある町並みを形成していこうという△引き算▽の都市計画の典型的な事例だといえよう。

情報を付加することだけがサービスだと思っ
ていたかつての日本人も押し売り情報を制限す
ることもサービスだと気付き始めて久しい。モ
ノや情報の有り余る社会の中、情報を満載した
タウン誌の間隙を縫って情報を厳選した新しい
タイプのタウン誌が部数を伸ばし、駅のプラッ
トホームでけたたましく鳴っていた車両発車の
ベルが次第に減り、お仕着せのツアーではなく
フリータイムを確保することが付加価値となる
ような海外旅行が定着し、懇切丁寧なマンツ
ーマンのサービスがかえって迷惑がられることさ
えあるのだ。

△足し算▽から△引き算▽へと時代は徐々に
変わりつつあるといえる。

四——新たな都市計画の方向は

しかしだからといって現在わが国における先
進的な都市でさえ△引き算▽の都市計画に移行
してしまっただけではないことは明らかだ。

おしゃれなストリートファニチュアがあふれ
んばかりになってきた大都市のメインストリー
トのデザインセンスはいまだに△足し算▽的
であるといえる。そもそも都市のベシックニ
ーズを満たすための都市基盤が整備されてしま
っただけではないことは、日々の交通渋滞や大都

市の住宅問題を考えれば一目瞭然である。都市
生活にしてもベアという△足し算▽と時短とい
う△引き算▽を同時に追い求めているのが現状
である。

△足し算▽と△引き算▽を同時並行でおこ
ないながら次第に△引き算▽の都市計画の比重
を増しつつあるというのが現段階であるといえ
よう。

①—△微分▽△積分▽としての都市計画

それでは、△引き算▽の都市計画が我々の究
極の目標かと問われると、当面のターゲットで
はあっても最終的な目標ではないと答えなければ
ならないだろう。

△引き算▽の都市計画は△足し算▽によって
煩雑にふくれあがってしまった都市をもう一度
客観的に見つめ直して整理するためには有効で
はあろうが、それ自体として確固とした都市像
を提起するものではない。

しかしだからといって、西欧型の近代化の過
程で都市の全体像を喪失してしまった日本の都
市においては△割り算▽の都市計画もにわか
に成立しないだろう。我々は来つつある△引き
算▽の都市計画の時代を見据えながら、その先
により包括的な都市計画のあり方を探らなけれ
ばならないのである。

それはおそらく、四則演算に則して比喩的に
いうならば、一方で△足し算▽と△引き算▽と
をまとめて精密化しながらも、もう一方で△割
り算▽のもととなる分母にあたる都市の全体像
を確かなものとして作り出していくといった作
業になるだろう。加減乗除といった静態的な演
算ではなく、現時点での運動モメントやその総
和を手がかりにするといった能動的な演算であ
るように思える。つまりそれは△微分▽や△積
分▽のような都市計画になるに違いないのだ。

もう少し説明を加えよう。

ここで△微分▽△積分▽の都市計画という耳
慣れないことばで表現したいのは、建設行為が
起こるたびにきめ細かな計画コントロールをか
けてゆき、その総和のなかで都市のあるべき姿
に関する世論を形成していくこうとするような都
市計画のことである。さらにいうならば、都市
アメニティの理想像を形態上の言語で表現する
ことを通して、形ある実体として都市の今後あ
るべき姿を共通に認識できるような都市デザイ
ンのあり方を考えたいのである。

②—△微分▽としての都市計画の実例

△微分▽△積分▽の都市計画の例をサンフラ
ンシスコにみてみよう。

サンフランシスコ市の都市計画条例（プラン

ニング・コード)がアメリカで最も精密に作られている条例のひとつとして名高い。たとえば建物の高さ規制は全市にわたって細かく規制されているが、傾斜地における高さ規制は単純にはいかない。傾斜地に一定規模の建物が段々に並んでいくのがサンフランシスコの坂道の景観を作り出しているのであるが、こうした景観を誘導するためには傾斜の程度に合わせて同一のフアサードをつくる建物の幅を規制しなければならぬ。市条例ではこの点を考慮に入れて、同一地点から高さを計測するべき建物の部分の幅を前面道路の傾斜によって、五〜一五%のとき六十五フィート、一五〜二〇%のとき五十五フィート、二〇〜二五%のとき四十五フィート、二五%を超えると三十五フィートと定めている(第二百六十条)。この条項にはまた、地区固有の状況に適合すべく数多くの例外規定が定められている。たとえば住居系の特定の用途地域ではフアサードを形成している両側の建物の高さの平均値まで中央の建物は建築可能である(第二百六十一条)ほか、リンコンヒル特別用途地区など特定の地区では景観を作り出している屋根部分の緩和割合が大きくなっている(第二百六十条(b)(1))。なお、自立あるいは建物に付随している看板も、建築物と同じ高さ規制を受けることになる(第二百六十二条)。

さらに、巨大な冷蔵庫のようなズンドウのオフィスビルを避け、間口が狭く奥行の深い敷地形状を反映した建物の形態を誘導するために、用途地域ごとに高さ規制のみでなく、建物平面の最大長さおよび対角線の最大長さを定めている(第二百七十条)。たとえばゾーニングマップ上C地区とされているところでは最高高さが八十フィートに制限されているだけではなく、建物平面の最高プラン長百十フィート、最高対角線長百二十五フィートが定められているのだ。最高プラン長と最高対角線長とが大差ないことから、この地区では平べったいセンベイのような建物しか建たないことになる。特に建物プランの対角線の長さを規制する最高対角線長のユニークなアイデアは、建築物をたんに延床面積で考えるのではなく、最終的な形態として考え、望ましい形態の実現のためにもっとも簡潔で効果的なコントロールのあり方を真剣に研究したひとつの創造的な結論としておおいに評価できる。

こうした細かい規制はたんに建築行為を抑制しているわけではない。こうした規制のなかで個々の建設行為にはつきりとした方向づけを与えることによってある特定の都市景観を維持強化してゆこうという意図を我々ははつきりと読み取ることがができる。

これを△(微分)▽(積分)的な都市計画と呼ぶことができよう。

④△(積分)▽(微分)としての都市計画の実例

一方、同じサンフランシスコでもマスタープランの中で述べられていることは趣が異なっている。サンフランシスコ市都市計画局による現行のマスタープランの八つのエレメントのなかで、ここでは「都市デザイン」の章をとりあげよう(マスタープランでは八つのエレメントのほか九つの地区別計画から成っている)。

「都市デザイン」の章は「都市パターン」、「保存」、「主要な新規開発」、「居住環境」の四つの項目からなっている。各章の冒頭にはまず「ヒューマン・ニーズ」という項が掲げられている。たとえば「都市パターン」の章のマスタープランは次のような文章で始まっている。

「サンフランシスコの良好な都市パターンこそ、おそらく、感性あふれる都市をつくり出しているものである。このパターンは都市が立地する自然地形と人為的な開発との目に見える複合した枠組みである。……このパターンは厳密に表現できるものではない。なぜならば、厳密さによってヒューマン・ニーズを反映した都市がつくり出されたことはないからである。厳密さではなくむしろ多様なそしていくぶん乱雑な

諸特質が総体を形成するような均衡と適合性の感覚が必要なのである」(サンフランシスコ市マスタープラン、I、5、2ページ)。

プランニング・コードが建築の細部を事細かに決めているのと対照的に、都市全体の大枠の議論をしようという意図が明白である。このように都市総体を見通すビジョンを獲得しようというのが△積分▽的な都市計画のあり方である。

五——これからの都市計画へむけて

ところで、△微分▽の都市計画にしても△積分▽の都市計画にしてもいわずゆる四則演算の都市計画にないひとつの特徴を有している。△微分▽△積分▽がそれぞれ接線方向や総和を表しているのと同じように、△微分▽としての都市計画は個々の固有な建設行為をとらえてそこにある方向性を持って微細な建築コントロールをかけていこうとしているわけであるし、△積分▽としての都市計画は総体的な都市像を構築することを目指す試みであるといえる。いずれの場合にも計画は運動の一環としてとらえられており、運動の現場にいる市民の姿が前提となっているのだ。

これを今度は市民の側からみると、どうだろうか。都市生活者として十分に生きるということとを簡単に表現すると、日常生活のそれぞれの場面で都市の魅力を実感でき、都市生活全般を満足のゆくものと振り返ることができるそんな暮らし方をするということであろう。都市アメニティの享受といってもよい。

しかし都市アメニティはたんに受動的に享受すれば事足りるというものではない。不満のあるところは改善し、気に入っているところは人とも共有することによって都市生活はより豊かに快適になってゆくものである。つまり都市アメニティとはたんに受け身で享受するだけでなく、市民自らの手で維持し獲得してゆくものであるのだ。

そしてそのためには能動的な市民の運動が必要である。

こうした市民の活動の典型的な例をイギリスに見ることができる。ローカル・アメニティ・ソサエティと呼ばれるまちづくり運動組織がそれである。ローカル・アメニティ・ソサエティは現在イギリス全土におよそ一千団体ほど活動しており、自分達の住む地域の都市アメニティ

の維持向上に目を光らせている。具体的には地元の建築許可申請の内容をチェックし、自分達を入れずに異議申し立てをしているのだ。このほか行政に頼らず自らの手で歴史的環境保全のキャンペーンをおこなったり、町角の整備を進めることなどを行っているのである。

地域アメニティはこのように運動の中で培われ、獲得されているのだ。

△微分▽△積分▽の都市計画はこうした動きを推進する方向へ向かっているといってもよい。

成熟都市というものが国において想定できるとすれば、そこにおける都市計画は個々の具体的な現状改善行為そのものを律する行動規範を形成していくようなマイクロな都市計画であると同時に、都市総体を構想できるに足る都市像を構築していくというマクロな都市計画であるといえよう。

いままで我々が漠然と都市アメニティと呼んできたものは、都市の美顔術の成果なのではなく、マクロ・マイクロ双方の活動の結果として生成してくる統一的な都市環境に他ならないのだ。△東京大学先端科学技術研究センター助教授▽